

# 中村純

一般社団法人全国美術商連合会代表理事会長  
株式会社東京美術倶楽部代表取締役社長  
株式会社中村好古堂代表取締役社長

老舗古美術店の社長、美術界を束ねる団体のトップとして多忙の日々を送る中村純氏。年に一度は外国へ出かけ、しばし日常とかけ離れた環境で過ごすことで、英気を養っている。お気に入りのイタリアを訪ね、とある男物の洋服屋に立ち寄った時のこと。ジャケットを品定めしていると店員は、「これはどうだ、こっちはどうだ」とうるさいほど一生懸命に話しかけてくる。ところが鏡の前で試着していると、それまでの勢いが嘘のように口を閉じてしまった。感想を聞くと、「止めたほうがいい。似合わない」。直そうとすれば直せるが、それは肩の線が崩れると、勧めない理由を言ったのだ。店員の話は中村氏の商売にも通じるものだ。自分が本当に良いと思わない品物でも売り、あとは知らないというのは商売人として許されない。お客様にNOと言えてこそプロである。いい旅には気づきがあり、そして学びがある。そんな旅の経験が、2000年余り続く美術店当主の静かなモチベーションになっている。

撮影◎吉永陽一

# 美術品は人の心を豊かにする たいせつなもの 新しい試みで日本の 美術業界を活性化する

江戸時代後期に創業、美術市場の激動期を乗り越え、19世紀最後のパリ万国博覧会には国から調査団の一員として派遣されるなど、古美術界の歴史に大きな足跡を残す中村好古堂。その5代目社長である中村純氏は蒐集家の信頼が厚く、社業を大いに発展させるとともに、業界全体の発展のために力を惜しみなく注ぐ。世界の美術市場が拡大する中、日本の美術界は低調と伝えられるが、現状を克服するために何から始めるべきか。業界の第一人者である中村氏に解決のためのアイデアを聞いた。

## アジア、アフリカの活況と 対照的に低調続く日本市場

伊藤 中村社長は古美術の世界では名高い中村好古堂の社長であり、業界団体のリーダーとしても長年活躍しておられます。本誌の読者の中には日本の美術界の現状や立ち位置について詳

しくない方もおられるかもしれませんが、そのあたりからお話をお聞かせいただけますでしょうか。

中村 明治維新から昭和の終わりにかけて、日本の美術界は活力的にあふれていました。国の経済が成長していくと美術品というものは力を持ってきます。経済的に余裕があれば、美術に目を向けられる人がたくさん存在できるという

ことかと思えます。それともうひとつ、作家はもちろん芸術家なので作品を制作することに意義があるのですが、生きていく上で作品が売れなければ困ります。自分の作品をいろいろな方に買ってもらう、世の中に広く浸透すると芸術欲がどんどん高まっていき、さらに上を目指す

ことができる、そういう循環なのです。今は日本の経済が弱くなったことが原因となって、